

第四章 指示詞から接続詞への意味拡張

—意味の希薄化による文法化—

4.1 はじめに

指示機能が曖昧なコソアについて、以下のような二種類が考えられる。

- (1) a. 冷戦時代は、キューバからの亡命者は自由の戦士ともてはやされ、
米国の市民権を与えられた。それが、いまはすっかり邪魔者扱いである。
(庵 1996 a、伊藤 2001)
- b. 花子は六時頃に帰宅し、それからアルバイトに出かけた。(伊藤 2001)
- c. 現在の職場は通勤に3時間もかかるために家族と過ごす時間がほとんど取れない。そこで思い切って転職することにした。(伊藤 2001)
- (2) a. これ! だめじゃないか。
- b. それ! 行け。
- c. あれ! 財布がない。
- d. あの一、すみません、駅はどこですか。(作例)

例(1)は、いずれも[そ-+X]の形式を用いて、後続する文の先頭に位置する。「そ-」は、先行文脈の先行詞を指示するというより「そ-+格助詞」の全体で、文と文の接続機能を果たしていると考えられる。

(1a)の「それが」は前文の「キューバからの亡命者」を指し示すことも可能であり、「その人たちが」にも置き換えられる。一方、「それが」は全体で、前文と逆接(庵 1996 aは「予測裏切り性を持つ」と考えている)の意味を表すこともできる。また、「ところが」のような逆接的な意味を持つ接続詞と置き換えられる。たしかに、(1a)の「それが」は辞書的意味ではまだ一語として登録されていないが、指示詞としての指示機能と接続詞としての接続機能を両方持っていることは明らかである¹。

もともと現場の物事を指し示す「それ」は(1b)の場合、前文が表す時間を指し示すようになる。一見、「その時から」と置き換えられるが、アルバイトに出かける時間は、別に「六時から」でなくても可能である。つまり帰宅した時間は六時頃であるが、アルバイトに出かける時間は別に「六時頃から」とは限らない。単に、一度帰宅してから、またアルバイトに出かけるという主体の動作の順序を表すだけである。それで、前後文脈が時間的継続関係を表す接続機能がより説明できると言えよう。

そのような解釈ができるためには、「それ」が事物を指し示す指示詞から「時

¹ 指示詞で指し示す具体的指示対象が存在するのに対し、接続詞は主に二つの文や段落の関係を表す故、文法的な機能を果たしている。前者はより詞的であり、後者は辞的である。

間」(六時)または「出来事」(帰宅する)に拡張されなければならない。

(1c)の場合、「そこで」は「因果関係」を表す接続詞としか解釈できない。先行文脈に場所に当る先行詞は「職場」しか考えられないが、後続文脈は別に「その職場」で何をするとはい及されていない。そのため、「そこ+で」を分けて考えると前後文脈の関係はおかしくなる。

例(1)から見ると、(1a)(1b)はともに指示詞と接続詞の二通りの解釈ができるのに対して、(1c)は接続詞の解釈の方が自然である。

(2)は助詞などの接辞を伴わない形である。主に「これ・それ・あれ」「この・その・あの」などがある。具体的な指示対象が現場にも、文脈にも存在しない点で、指示詞と区別される。つまり、何かを指しているのではなく、話し手の発話当時、一時的な感情を表す感動詞の使い方である。

結論から言うと(1)(2)ともに指示機能が曖昧なコソアに属するが、両者が使われる場面と派生過程は違うと考えられる。

接続詞の解釈は必ず前後文脈が必要なので、直接、現場指示からの拡張というより、文脈指示を介しての拡張と考えられる。

逆に感動詞の場合は、そもそも話し手の気持ちを表す言葉であるゆえ、現場の知覚と深く関わると考えられる。

指示機能が曖昧なコソアとして、本章ではまず(1)のようなコソアを含む接続詞の使い方を検討したい。

指示機能が曖昧であるというのは「それ」が先行分脈の何かを指すのではなく、「それ+X」全体で、先行文と後接文の接続機能を果たすものであることによる。

接続詞の中には、「それで、それに、それなら、それから、それでも」のように「それ」を含むものが多くあるが、それに対して、「これ」²と「あれ」はそれほど多く使われていない。コ系語は「こうして」のように接続詞への派生はないわけではないが、全体的に名詞、副詞への拡張が多いようであり、ア系語の複合語はさらに少ない。

本章では指示詞が含まれる接続詞を指示詞の意味が希薄化したものと見て、問題点を次の三つに絞ることにする。

- ①接続詞と指示詞はどう区別されるか。(共通点と相違点)
- ②指示詞と接続詞はどう関連しているか。(連続性と意味拡張)。
- ③何故コソアの中で、ソ系語だけ接続詞に拡張しやすいか。

² 広辞苑第五版を調べると、たしかに「これ」も、「これから」「これきり」「こればかり」「これまで」「これほど」のような語彙化したものが存在するが、いずれも、接続詞の範疇に入っていない。

4.2 コソアを含む接続詞³の先行研究

ソ系指示詞を含む接続詞についての研究はひけ (1985、1986、1987)、比毛 (1989)、浜田 (1993、1995 a、1995 b)、庵 (1996a、1996b、1997、2007)、伊藤 (2001)、馬場 (2006) などがある。

ひけ (1985、1986、1987) と浜田 (1995 a、1995 b) の研究は、主に類義的な性質を持つ接続詞を中心的に論じている。

指示詞との連続性という観点からの研究について、庵は「それが」と「それを」など「指示性」を持つ接続詞を指示詞と接続詞の接点と考えている。

伊藤 (2001) は「それも」の文法化についてを研究し、馬場 (2006) は、「そして・そうして」という指示詞を含む接続詞の研究を行っている。

4.2.1 接続詞の定義

4.2.1.1 接続詞と指示詞の区別

まず接続詞の定義について、庵 (1996b : 83、2007 : 138) は「テキスト的機能」と「統語・意味的特徴」を分けて以下のように論じている。

【テキスト的機能】

- a. 複数の文がそれらの間の連鎖的 (sequential) 意味で結びついている時に、その連鎖的な関係を明示する。(cf. Halliday & Hasan 1976)
- b. 文頭に位置し、それを含む文が先行文脈とどのような意味関係にあるかを前触れし、読み手/聞き手のテキスト解釈を容易にする。

【統語・意味的特徴】

- c. 具体的な指示対象を持たない。(接続詞であるための必要条件)
- d. 内部にソ系統の語を含み、かつ、それを省略した形もまた a. ~c. の性質を持つならば、そのソ系統の語の有無で意味は変わらない。

接続詞のテキスト的機能 (a. で言及される結束性) は指示詞と共通すると考えられる。

c. は指示詞と接続詞を区別する一番有力の条件である。つまり、具体的な指示対象を持つものは指示詞で、そうでないものは接続詞である。その区別は例 (3) と例 (4) で表すことができる。例 (3) の「それ」は先行文脈の狸を指す故、「その狸」に置き換えられるが、例 (4) は「その+NP」に置き換えられない。

(3) あんたがたどこさ 肥後さ 肥後どこさ 熊本さ 熊本どこさ 船場さ
船場山には狸がおってさ それ(その狸)を漁師が鉄砲で撃ってさ 煮て
さ 焼いてさ 喰ってさ… (「あんたがたどこさ」、庵 1996b : 84)

(4) お重 : だから、流行病で息子さん夫婦が亡くなっちゃったんだよ。生ま

³ ソ系語以外、接続詞に派生したのは、「こうして」だけのようであるが、ここでコソアを含む感動詞と比較するため、便宜上コソアを含む接続詞と呼ぶことにする。

れたばかりの赤ん坊を残してさ。藤吉さん夫婦はその赤ん坊を引き取って一生懸命育ててるんだよ。お金がいるのは当たり前だろ。それをあんたって男は。(庵 1996b : 84)

また、接続詞の下位分類として、庵は「指示的接続詞」と「代用的接続詞」の二つに分けている。その違いは文脈指示における指示詞の「指示」と「代用」の違いと共通している。(詳しくは庵 1996a、1996b を参照に)

(5) 指示：テキスト的意味の付与がある。

代用：テキスト的意味の付与がない。

指示詞の代用機能から拡張された「代用的接続詞」の「それ」はテキスト的意味の付与の機能を担わない。「それ」の有無により意味が変わらない。逆にいうと、「それ」はゼロ形式になる。

それに対して「指示的接続詞」とは「それ」がテキスト的意味の付与を担う接続詞であり、「それ」が省略できないのが特徴である。庵は大部分の接続詞は「代用的」と考えている。つまり、先行詞を指示するのではなく、先行文脈全体を代用する機能を果たしている。しかし、一部分の接続詞はテキスト的意味の付与があり、「指示的」である。

たとえば、「それが」と「それを」などである。「それが」「それを」全体は接続詞であり、「それ」は非指示的の**はず**であるが、その同時に「それ」の部分には予測裏切りというテキスト的意味の付与がある故、「指示的接続詞」とみなされる。それぞれの関係をまとめると表 1 になる。

表 1：指示、代用と接続詞の関係 (庵 1996b : 86 より)

	予測裏切り性を持つ	予測裏切り性を持たない
「それ」が省略不可能	それが、それを (指示的)	それから、それに (代用的)
「それ」が省略可能	それなのに ⁴ 、それにも かかわらず (指示的、代用的)	それで(は)、それなら(ば) (代用的)

伊藤 (2001) は形態面から接続詞の分析をしている。

具体的な指示対象を持つ「それ」に「も」が付加された言語形式においては、「それ」が「さえ」「まで」といった取り立て詞を伴い得るが、接続表現としての「それも」は、このような形で分割されることはない。(伊藤 2001 : 950)

(6) (店先で)「それと、これと…あ、あっそれもください。」

(7) 花子は太郎に旅行がだめなら、せめて食事に連れて行ってくれと頼んだ

⁴ 「それが」と「それを」という形は全体が「予測裏切り」という意味を表すための機能を担っているが、「それにもかかわらず」と「それなのに」はそうではない。その違いは「なのに」、「にもかかわらず」という部分が語全体の予測裏切りの意味を担っていることであり、やはり「それ」の有無と無関係である。

が、太郎はそれ [さえ／まで] も拒んだ。

(8) a. 太郎の病気はストレスからくるもので、それ [*さえ／*まで] も重症です。

b. 太郎の病気はストレスからくるもので、しかも重症です。

例(6)は指示対象を持つ「それ」に「も」が付加された言語形式とは明確に区別できる故、指示詞であることは明らかである。

庵は「それ」が「その+NP」に置き換えられるかどうかによって、指示詞と接続詞を区別している。しかし、例(7)の場合は、直接「その+NP」で換えられないため、一見庵説と食い違うように見える。

「それ」は先行文脈のある指示対象を指示しているというより、文脈全体が先行詞になっていると言えよう。つまり、「旅行がダメなら、せめて食事に連れて行ってくれと頼んだ」ことで、花子が太郎にある「願い」を出したという推論ができる。

「それ」は「せめて食事に連れて行ってくれ」という「願い」を指しているので、「その願い」に置き換えられるだろう。

「それ」が後接する助詞(例(6)の場合は「も」)から独立して、具体的な指示対象を持つものが指示詞であるという点では、庵も伊藤も共通している。

例(8a)は「それ」と「も」が分割して使われることができない。それに加えて、「しかも」と置き換えられる故、接続詞と見なされる。

伊藤の考えをまとめるとまとめると、以下の二点が言えるだろう。

①分割可能性

指示詞としての「それも」は「それ+さえ／まで+も」というように、「それ」と「も」が分割できる。

②ほかの接続詞との置き換え

接続表現としての「それも」は「しかも」と置き換えられる。

馬場(2006)は指示詞を含む接続詞を「指示語系接続詞」と呼んでおり、「持ち込み機能」(長田1984)を持つという点で指示語と共通するとしている。しかし、共通点がありながらも、以下の四つの相違点もある。

- ①指示語系接続詞は、先行文と後続文との論理的な関係付けを明示的に表すことによって、後続文の文脈展開に制約を与える。これに対して、指示語はそれ自体では、指令機能に基づいて素材的内容を持ち込むだけで直接的に後続文の文脈展開に制約を与えることはなく、後続文内での役割は他の要素によって示される。
- ②指示語系接続詞は全体で一語として扱われるが、指示語は後続要素と分離できる。
- ③指示語系接続詞の(形式上の)指示語の部分は、その指示内容を具体的に先行文から取り出すことができず、また、本来の指示語が持っている概念範

疇もなくなっている。

④指示語系接続詞は「どこで」などのように疑問化することはできないが、指示語ではできる。

以上の先行研究で言及された区別は以下の表2にまとめられるだろう。

表2：指示詞と指示詞を含む接続詞の異同

	指示語	指示詞を含む接続詞
分割可能性	○（指示語＋助詞）	×（一語として扱われる）
テキスト的意味の付与（指示語の概念範疇）	○指示的指示詞（典型） ×代用的指示詞（非典型）	○指示的接続詞（非典型） ×代用的接続詞（典型）
疑問化の可能性	○（具体的意味を持つ）	×（具体的意味を持たない）
他の接続詞との置き換え	×	○
文脈展開の機能	○指令機能に基づいて素材的内容を持ち込むだけで、直接的に後続文脈展開に制約を与えることはない【間接展開】	○論理的な関係付けを明示的に表すことによって、後続文の文脈展開を制約する。【直接展開】

4.2.1.2 接続詞における機能の種類について

比毛（1989）は接続詞が表す先行文脈と後接文脈の関係（機能）を以下の五つに区別している。

- ①動作の継起的な関係
- ②原因-結果的な関係
- ③論理的な関係
- ④対立の関係
- ⑤選択関係

そのなかで、とくに指示詞を含む接続詞と関連しているのは、「そして」「それから」（動作・事態の継起）、「そこで」「それで」（原因-結果関係）、「それでも」（対立関係）、「それとも」（選択関係）などがあるとしている。

また、浜田（1995a）は「そして」「それで」「それから」という従来「添加」「累加」「列叙」の接続語として同類型に属するものを「添加」と呼んでいる。

(9) 赤くて、[それから／そして] きれいな花が咲いていました。

例（9）は動作を表さない点で、ひけ（1985）が分類した「継起的動作」を表す機能と区別する必要がある。

以上のことで、接続詞が担う機能は一つだけとは限らないことが分かった。たとえば、順接の継起関係はしばしば、並列、累加、因果関係と連続している。

(10) そして：動作の継起的関係（ひけ 1985、1989）、並列・同時関係（ひけ 1985）、添加（浜田 1995）

それから：動作の継起関係（ひけ 1985、比毛 1989）、並列・累加関係（ひけ 1985）、添加（浜田 1995）

それで：因果関係（ひけ 1986、1987）、添加関係（浜田 1995）

4.2.2 指示詞と接続詞の接点

4.2.1 で先行研究における指示詞と接続詞の区別をまとめたが、指示詞を含む接続詞は、指示詞から派生してきた故、指示詞から接続詞まで連続体をなしていると考えられる。

①典型的な指示詞

②指示詞＋接続機能（非典型的指示詞、もしくは非典型的な接続詞）

③典型的な接続詞

庵は「それを」「それが」のようなテキスト的意味の付与がある「指示的接続詞」を非典型的接続詞として、指示詞と接続詞の接点と見ている。しかし、中間的なものはそれだけでは止まらない。実際に「それで」「そこで」「そうして」のような典型的接続詞でも、指示詞と接続詞の区別が付かない場合もある。

4.2.2.1 「それが」「それを」（庵 1996 a・1996b、浜田 1993）

庵は典型的接続詞を、「それ」が先行文脈の代用であり、「テキスト的意味の付与」を持たず、省略しても意味が変わらない性格を持つと定義している。

逆接関係を表す「それが⁵」と「それを」は先行文脈から「予想裏切り性」（テキスト的意味）を受け、省略できない故、庵は非典型的な接続詞と見ている。また、「ところが⁶」のような逆接接続詞と置き換えられるので、「それ＋が」「それ＋を」は接続詞の機能も有し、まさに指示詞と接続詞の中間的なものであると言えるだろう。例（1）と例（4）を再掲する。

(1) a. 冷戦時代は、キューバから亡命者は自由の戦士ともてはやされ、米国の市民権を与えられた。それが、いまはすっかり邪魔者扱いである。（庵 1996a、伊藤 2001：307）

a'. 冷戦時代は、キューバから亡命者は自由の戦士ともてはやされ、米国の市民権を与えられた。ところが、いまはすっかり邪魔者扱いである。

(4) お重：だから、流行病で息子さん夫婦が亡くなっちゃったんだよ。生ま

⁵ 庵（1996b）は「それ＋助詞」タイプの接続詞が「その NP＋助詞」と密接な関係にあると考え、「その NP＋助詞」と同じように、「予測裏切り性」を持っていると論じている。「それが」「それを」のみ「予測裏切り性」を表すのは、「が」「を」が文法格であり、具体的な意味を持たないためである。その他の助詞はそれ自体の意味が明瞭であるため格助詞本来の意味以外の「予測裏切り性」を表すのが困難である、としている。

⁶ 「それが」と「ところが」の違いについて、浜田（1993）では逆接系接続語の「しかし」、「だが」、「ところが」などには、対称的な用法が存在する（前件と後件を入れ替えても成立する）のに対し、「それが」は成立できない点で、「それが」を典型的な逆接接続詞から外している。（e.g. 太郎は風邪を引いている。{*それが／ところが／しかし、} みんなは元気だ。）

れたばかりの赤ん坊を残してさ。藤吉さん夫婦はその赤ん坊を引き取って一生懸命育ててるんだよ。お金がいるのは当たり前だろ。それをあんたって男は。 (庵 1996a : 84)

- (4) ' お重：だから、流行病で息子さん夫婦が亡くなっちゃったんだよ。生まれたばかりの赤ん坊を残してさ。藤吉さん夫婦はその赤ん坊を引き取って一生懸命育ててるんだよ。お金がいるのは当たり前だろ。それなのにあんたって男は。

4.2.2.2 「それも」(伊藤 2001)

伊藤 (2001) は接続機能を持つ「それも」と接続詞「しかも」の置換を分析し、両者の情報付加の仕方が違うことと「それも」は「しかも」と違って指示機能が残ることを提示している。

まず、両者の情報付加の仕方が違うことについて、「AそれもB」はAを受けて、BでもってAをさらに詳細化する形でしか情報が付加されないのに対して、「AしかもB」においては、情報付加も行われるが、BがAに並置される形での情報付加も行われうるとしている。

- (11) a. 昨日は雨降りで、[それも/しかも]土砂降りだった。
b. 昨日は雨降りで、[*それも/しかも]風が強かった。(伊藤 2001)

例(11a)の「土砂降り」は雨降りの状態をさらに詳細に描写する。この場合、「これも」も「しかも」も自然な形で用いられる。これに対して、「風が強かった」の部分は先行する「雨降り」の部分と並置される。この場合は、「それも」を用いると非文となる。

その理由は、「も」は取り立て助詞で、背景に他者が想定されている。「それも」の「それ」は「雨降り」を直接指示するため、「雨振り」の細部情報以外の他者はあり得ない。これに対して、「しかも」が指示するのは「雨降り」だけでなく、「昨日」の全体の状況だと考えられるゆえ、「雨降り」以外の他者(風)が想定され得るだろう。

論理的に「AそれもB」は常に「AしかもB」に置き換えられるが、「AしかもB」は必ずしも「AそれもB」に置き換えられるわけではない。

伊藤は「それも」の機能に見られる特異性が、同語が指示詞「それ」+とりたて詞「も」が文法化したものであることに起因すると主張している。「それも」の前段階として「その+名詞句」+「も」の存在が想定される。

- (12) 医療ミスのニュースが相次いでいる。[その医療施設も/しかも/それも]大病院がと取り上げられることが多い。ミスは氷山の一角と言う人もいる。(毎日新聞 2000/9/28、伊藤 2001 : 960)

例(12)の「それも」は「そのNPも」に置き換えられるので、庵の観点から見れば、指示詞と区分されるはずであるが、接続詞「しかも」にも置き換えられるので、接続詞としても認められる。

また、「しかも＋それは…」という形式は許されるが、「それも＋それは」に置き換えられないことが分かる。

(13) a. 何千年も変わらない遊牧民の暮らし。電気も自動車も文字もない暮らしが、学者や行政官の目を通してではなく、一人の少女の目をとおして具体的に語られていて、それだけでも魅力的である。[しかも、 ϕ /しかも、それは] 最近まで実際に行われていた生活なのだった。

b. 何千年も変わらない遊牧民の暮らし。電気も自動車も文字もない暮らしが、学者や行政官の目を通してではなく、一人の少女の目をとおして具体的に語られていて、それだけでも魅力的である。[?それも、それは/それも、 ϕ] 最近まで実際に行われていた生活なのだった。

(毎日新聞 1999/10/31、伊藤 2001 : 962)

伊藤の考えによると、「それも、それは」が不自然の原因は、「それも」の「それ」が指示詞としての機能が残っているからである。

そうすると、「予測裏切り性」ではないが、「それも」も「テキスト的意味の付与機能」を持ち、「それが」「それも」と同じく「指示的接続詞」に属すると言えるだろう。

指示機能が曖昧なコソアとしてまず「それが」「それを」「それも」のような文法化はまだ完成していない指示詞と接続詞の中間的なものが考えられる。

4.2.2.3 「そこで」「それで」(ひげ 1986)

「そこで」は「それで」とともに、前後文脈の間の因果関係を表す接続詞である。このような、接続詞として認められる「そこで」「それで」にも指示詞から接続詞まで、いくつかの段階が見られる。

①「そこで」

指示詞としての「そこで」が指し示すのは、先行する文において主体が動作を行う場所である。この場合、具体的な場所性の意味を持つ故、「どこで」のような疑問詞によって尋ねることができるのである。

テキスト的な立場からみれば、それは先行する文の部分を後続する文のなかに繰り返しながら、文の間に意味的なつながりを作り出しているといえる。

言い換えれば、この時の「そこで」は先行する文脈に差し出される空間的な状況の全体をうけることになる(例 14)。

(14) (画集の) あけたところには、セガンチニの死ぬるところがかいてある。

冰山をとなりにもった小屋のようないなかやである。ろくな暖炉もない。

そこで画家は死に瀕している。(青年 三〇、ひげ 1986 : 85)

例(15)の場合は本来の場所的な意味をすりへらして、あらたに出来事の状態的な意味を指し示すように変化している。「その時」に置き換えられる故、「出来事－状況」的な意味の中に時間的な意味も併せ持っているだろう。

(15) ジイー、ジイーと、ながく尾をひいて、スパアクルがちった。と、そこ

で、ピタリおとがとまってしまった。(蟹工船 二七、ひけ 1986 : 85)
次の例 (16) は状況性と部分的な同時性を表す例である。

(16) きゅうに朋友の名を失念して、のどまで出かかっているのに、出てくれないような気がする。そこであきらめると、出そくなった名は、ついにはらの底へおさまってしまう。(草枕 六九、ひけ 1986 : 85)

また「そこで」が完全に指示性をなくし、出来事の中の論理的な関係を表すようになるのが例 (17) である。

(17) 急に家のなかはさびしくなってきた。兄の幸平は失意のひとでブラブラしている。母や姉は、いなかから出てきたばかりである。そこで、岸元はふたたび麴町の学校へかようことにして、家計をたすけようとおもいたった。(春 二二六、ひけ 1986 : 86)

(14) ~ (17) で「そこで」の意味変化は、大まかに「空間→時間→出来事・状況的意味→同時性(継起的関係)→出来事の中の論理的な関係」の順をなし、指示機能から接続機能へのメタファーと言えよう。特に例 (14) の場合、指示詞としても解釈できるし、接続詞としても説明できる。

②「それで」

指示詞としての「それ+で」は後続する文の構造のなかで主体の動作に直接参加する「手段」をつとめながら、補語となって、対象的な内容の一部をかたちづくっている。

(18) マッチをすって、それでまつずみをつけてみた。(放浪記 二五、ひけ 1986 : 87)

例 (18) の場合、「それ」にははっきりした先行詞(マッチ)を有しているので、典型的な指示詞と考えられる。

また、具体的な対象ではなく、先行する文に差し出される出来事全体をうける例もある(例 19)。

(19) 「懺悔ということは、結局一遍こっきりのものだ。それでつみがきえた気になっている人間よりは、懺悔せず、ひとりくるしんで、はりのある気もちでいる人間のほうが、どれだけ気もちがいいか、わからない。」(暗夜行路 後一九七、ひけ 1986 : 87)

例 20 は動作のやりかた・方法の規定を表す例であり、指示機能と接続機能とをあわせ持っていると考えられる。

(20) 気にいったところなら、どこへでも、よる何時まででも、とびあるいていようという。それでわがままでないといえますか。(真知子 七七、ひけ 1986)

原因・理由を表す例が先行する文の特定の部分を指し示しているとするれば、後続する文の中で手段を表す補語として働いて、指示語の性格を留めている可能性もある(例 21)。

(21) あすはとてもうれしいんですよ。すこしばかりの稿料が入ります。それでわたしはゆけるところまで、いってみたいとおもいます。(放浪記 一三七、ひげ 1986 : 88)

(22) 実はさっき妻とすこしけんかをしてね。それで、くだらない神経を興奮させてしまったんです」と先生がまたいった。(言語学研究会、ひげ 1986 : 88)

一方、例 22 の場合、「それ」は完全に指示機能を失い、先行文脈と後続文脈の因果関係を表している。妻とけんかしたという理由で、その結果、神経を興奮させたわけである。

因果関係を表す接続詞の「それで」は、元々指示詞の「それ」に格助詞「で」(方法手段をあらわす)がついて拡張されたものである。指示機能から接続機能への意味的变化は「手段→出来事全体を指す→動作のやりかた・方法の規定→原因・理由→因果関係」のメタファーである。左側は指示詞としての使い方であり、右側は接続機能が働いていると言えるが、「そこで」と同じく具体的な境目はつけにくい。

4.2.2.4 「そして」と「そうして」(馬場 2006)

馬場 (2006) では、「そうして」と「こうして」の指示語系接続詞と指示詞との連続性を論じている。明らかに指示語であるものは、現場指示用法が取り上げられている。文脈用法でも、「そうして」「こうして」は先行詞に具体的な指示内容が叙述されており、後続文で様態を表す構成要素となる場合、指示詞であると見なされている。

(23) 青い光の中で、馬はひっそりと太郎を見つめ、太郎は、その前に立ちつくした。どのくらい、そうしていただろう。(馬場 2006 : 94)

例 24 は先行文での動作性の叙述内容を指示内容として持ち込むことができ、同時に、「継起的」(そうして)あるいは「手段-結果的」(こうして)な論理的関係を先行文と後続文とが持ち得る場合、指示語とも接続詞とも解釈される。

(24) 大造じいさんは、花の下に立って、こう大きな声で、がんによびかけた。
そうして、残雪が北へ北へと飛び去っていくのを、晴れ晴れとした顔つきで見守っていた。(馬場 2006)

「こうして」「そうして」の「し」は実質的な動作性の意味がなくなり、先行文と後続文との間に累加(そうして)あるいは結果的状态の導出(こうして)といった論理的関係が存在するようになるが、このようにして初めて、接続詞と認められると言えよう。次の例 25 には、先行文脈の動作状態を指せず、前後文脈の継起的関係を表す傾向がある。

(25) a. しかし、これを聞いている中に、下人の心には、或勇気が生まれて来た。それは、さっき門の下で、この男には欠けていら勇気である。そうして、又さっきこの門の上へ上って、この老婆を捕らえた時の勇気と

は、全然、反対な方向に動こうとする勇気である。(芥川竜之介『羅生門』、馬場 2006)

b. はりよのすんでいる川を守るために、下水道工事の計画を練り直した町もありました。また、用水路とはい水路を別々にして、きれいな流れとはりよのすがたをとり取りもどした町もできました。そして、町内の小川や池にはりよを放流することも試みられるようになりました。

こうして、双葉中学校の科学部員たちが、最初にのぞんだ、はりよを育てて自然に返してやるという試みが、少しずつ実をむすんでいきます。(馬場 2006 : 96)

「こうして」と「そして」の違いについて、馬場は「そして」は大きく継起的用法と累加的用法との二つの用法を持ち、一方、「こうして」は何らかの手段となるべき行動を行った後、あるいは、何らかの状況から生じる結果的状态を導くと論じている。具体的に例 (25b) のように、先行文の内容をまとめて、結果的状态を導く「こうして」は「そして」に置き換えにくいと考えている。

また、「そして」には「そして」⁷という短縮形があるが、すべての場合、置き換えられるとは言えない。馬場は継起的な用法では「そして」と「そして」はほぼ置き換えられると言えるが、文の途中で用いられ、直前が動詞述語ではない累加的用法では「そして」の使用が不自然であると論じている。

(26) a. 道が暗くて、[そして / ?そして]何も見えなかった。(田中 1984)

b. 空は青く、[そして / ?そして]、あくまでも澄み切っている。(森田 1989、馬場 2006 : 96)

つまり、「そして」は「そして」から拡張してきたとともに、動作性(具体的な指示対象)も徐々に希薄化していると考えられる。

4.2.3 指示機能・照応機能・接続機能の連続性

指示詞から接続詞への機能の変化は、次のように示すことができるだろう。

(27) 指示機能→照応機能(指示・代用)→接続機能

指示詞と接続詞の接点について、庵は「それが」「それを」を取り上げている。しかし、「予測裏切り性」の原理は常に有効とは言えない。

予測裏切り性を持つ「それにもかかわらず」「それなのに」のような、「それ」が省略できる接続詞もあれば、「それに」「それから」のような、予測裏切り性を持たないけれど、「それ」がゼロ形式になれない接続詞もある。

指示詞の「その+NP」との置き換えと「テキスト的意味の付与」の観点から見れば、「それも」も中間的な接続詞として考えなければならない。

⁷ 「そして」と「こうして」の両方とも接続詞として認められる。接続詞の「そして」には「そして」という短縮形があるが、「こうして」には「こして」という縮約形が存在しないため、両者の接続詞への拡張の度合いが一致ではないと考えられる。

また、典型的な接続詞と認められている接続詞（そこで、それで）も、中間的な使い方がよく見られる。

「指示機能」は「文脈指示」の照応機能を介して、接続機能と連続しているが、以下の表3で示すように、「指示的」接続詞は照応機能と接続機能の中間に位置すると考えられる。

表3：「指示機能・照応機能・接続機能」の連続性

指示機能	照応機能（指示・代用）	接続機能
指示詞		「指示的」接続詞 代用的接続詞
それ		それが、それを それに、それで
「それ」＋「X」は先行文脈の先行詞を指す。「そのNP＋X」と置き換えられる。	「それ」は「もの」から「時間・出来事」へ抽象化する。	「それ＋X」が全体的に文と文の接続機能を担う。「それ」は先行する文脈を代用する。

4.3 実例分析—これから・それから・あれから—

指示詞と接続詞の違いについて、指示詞の方は具体的な指示対象があり、後続する格助詞や副助詞などと分割できるのに対して、接続詞の方は「指示詞＋X」が全体で機能するという違いがあるということが、先行研究から大まかに言えると思う。

しかし、指示詞としての「これ・それ・あれ」は文脈によって、置き換えられない場合もある。また、接続機能を果たしている（接続詞と認められる）のは「それ」だけである。

それは「これ・それ・あれ」のそれぞれの抽象化方向が違うことに起因すると考えられる。

たとえば、「これ・それ・あれ」の後ろに格助詞の「から」がくる場合、「これから」も一語として使われるが、文と文の接続機能として働き、いわゆる接続詞として認められるのは「それから」だけのようである。

(28) ①指示詞としての「これ・それ・あれ」＋から

②接続詞としての「それから」≠それ＋から

ひげ（1985）は「そして」と比較しながら、「それから」の継起および並列機能を論じている。

浜田（1995 a）も添加機能の観点から「そして」「それから」「それで」の異同を分析している。

本論は意味拡張の観点で「これから」「それから」「あれから」の相違点を見て行きたい。

4.3.1 「これから」

まず (29) ～ (34) で、一語として使われている「これから」の用例を見て行きたい。まず、「これ」で時間を指す用例が多く見られる。

主語位置に来る「これから」

(29) 逮捕後、正人さんは俊さんの遺影に「これからが厳しい。もう少し力を貸してくれ」と語りかけたという。俊さんの死から逮捕まで7カ月間かかったことについて「愛知県警は『しっかりした鑑定結果を待っていたら遅くなった』と話していた。(毎日新聞 2008/2/8)

述語位置にくる「これから」

(30) 自分もみんなみたいに、人に力をあたえたいなと思います。これが一番の夢です。この病気を早く治して、その夢をもっと実現させていきたい、と強く思います！

本当の闘いはこれからです。(毎日新聞 2008/2/6)

体言を修飾する「これから」

(31) そう言われ続けたのは承知しており、すべきだったと思う。これからの仕事に生かすことで、府庁や府議会へのお礼としたい。

(毎日新聞 2008/2/6)

用言を修飾する「これから」

(32) 病院事業局も医師や看護師らを対象に265戸あるが、有料化については、人材確保の観点などからこれから検討する。(毎日新聞 2008/2/8)

文全体を修飾する「これから」

(33) 自死遺族の相談も増えており、「なぜ、止めることができなかったのか」「これからどうやって生きていけばいいのか」など自分を責め、喪失感を感じ続けている人が多いと、協会の高橋みのり事務局長は話す。(毎日新聞 2008/2/6)

(34) 中国側は北京五輪のイメージが傷つく話なので気分が悪いだろう。これから本番に向け、この国の人権問題を欧米メディアは注視していく。(毎日新聞 2008/2/4 東京朝刊)

「これから」は指示詞の「これ」と起点を表す格助詞「から」から派生したものである。以上の例での「これ」は「この+NP」に置き換えられない。つまり、具体的な指示対象を持たないと考えられる。

(29) ～ (34) に見る「これから」は全体で「将来」「今後」「未来」のことを表すゆえ、「これ」は先行文脈に照応するのではなく、話し手(書き手)が話す時点(現在)を指し示す「絶対指示」である。「この時」と置換できないが、発話時点を示すため、「今」と置換えられる。

このような「絶対指示」の例は「時間表現」だけではなく、先行文脈の先行詞で表す空間を照応する用例もある。例(35)の場合、「これ」は話し手が話

す時点で存在する場所を指し示すので、「ここ」と置き換えられる。

(35) 「姉さんは此村（ここ）？」

「いいえの、これから南に、名張と言う所ありますわナ、其処ですわナ。」

「名張、それじゃ、あの月の瀬の川の向う側から行く。」（毎日新聞

2008/2/6 中部朝刊）

今回集めた例文を見る限り、時間以外の拡張は非常に稀である。「これから」の特徴は以下の三つにまとめられる。

① 「これから」を含む文の述語は現在・未来を表す形が多い。

② 文と文（段落と段落）を接続する位置だけではなく、話の初めや文中に現れることもある。また、文中で果たす役割からみると主語、述語、修飾語また副詞などがある。

③ 話文の場合が多い。とくに話し手が未来に対する理想や予想について言う場面によく見られる。

一語化した「これから」の「これ」は時間を表すが、話し手（書き手）が話す（書く）時点を基準点とする点で、「絶対指示」である。「この時」に置き換えられない故、先行文脈を指示する指示詞としての機能と区別する必要がある。また、文と文の中間に位置する「これから」も、先行文脈の出来事と直接関係せず、後に来る文全体の時間副詞の表現である。ここでは接続機能が担われていないと言えよう。

意味拡張の観点から見れば、「これから」の場合は指示詞の「これ」と格助詞「から」と合わせて「時間副詞」へと意味拡張していると見られる。

4.3.2 「あれから」

「あれから」は大辞泉、大辞林及び広辞苑に登録されていないが、(36)～(39)の用例からみると、「あれ」は「過去の事件」や「過去の出来事」を表したり、その事件が発生した過去の時点を指したりする用法が多い。今回集めた用例を見る限り、「あれから」は全て文と文（段落と段落）の接続位置に付くと分かった。

(36) バブル絶頂期の89年に日本の衰退を予想したエコノミスト、ビル・エモット氏が「日はまた昇る」を世に出したのは06年2月。15年余りを経ての日本復活宣言だった。本の帯はこううたう。「ゆっくり着実に進むカメ（日本）が足の速いウサギ（中国）に勝つ！」

あれから2年もたたないのに、もう日は沈むのか。悲観と楽観、安堵（あんど）と不安。日本をめぐる評価、空気の激しいブレにあきれるばかりだ。

（毎日新聞 2008/2/8）

(37) 1945（昭和20）年の終戦で日本は大きな転換を迎えた。それは個人も同じであった。私たち新聞記者の大先輩である、むのたけじさん（9

2) は自らに戦争責任を突きつけて、朝日新聞を退社した。あれから62年、現役ジャーナリストのむのさんに登場してもらった。(毎日新聞 2008/1/23)

(38) 昭和59(1984)年1月、交通事故に遭ったのです。幼い一人娘を残して……。

あれから21年。お嬢さんが先日結婚しました。(毎日新聞 2008/1/27)

(39) 映画デビュー作「蝉しぐれ」(05年)では、市川染五郎さんの子ども時代を演じて、キネマ旬報ベスト・テン日本映画新人男優賞を受賞して注目を集めました。あれからたくさんの映画に出られて、ご自身で成長を感じることはありますか。(毎日新聞 2008/1/31)

具体的に「あれから(半世紀以上)がたった/すぎた」、や「あれから+(半年/一年/五十年/一年半/10年)」など、「あれから」の後に時間の幅を表す語がくる用例が多く見られる。これらの例の「あれ」は、「あの時」や「あのこと」、「あの事故」(例38)、あの映画(例39)などに置き換えられる。

談話領域のア系語は先行研究で分かるように、話し手と聞き手の共通する体験や話し手の過去体験を指し示す機能を持つ。文章(書き言葉)の場合、聞き手の知識を配慮する必要はないので、主に話し手の過去経験を指示する機能を果たすと言えよう。「あれから」で示される過去の時点は、絶対時点である。

「あれ」は「もの」から「時間」と「出来事」へ抽象化が進んでいる。それに「あれから」は文と文、段落と段落の接続位置に現れるが、主な機能は先行文脈で表す「過去の時点」や「過去の出来事」を指し示す故、先行文脈に依存する文脈指示であると考えられる。

4.3.3 「それから」

「それから」は「これから」「あれから」と違って「時間」を表す機能以外に、数多くの用法を持っている。

「大辞泉」で見ると、接続詞用法の「それから」は例のように説明されている。

(40) a. 「家を出て、それから駅へ向かった」(大辞泉)

b. 「鉛筆それから下敷きを買った」(大辞泉)

例(40a)は「前述の事柄に続いて、あとの事柄が起こることを表す」接続機能で、(40b)は「述の事柄に加えて、あとの事柄を示す」機能である。

前者は「継続」の意味を表し、「その次に」「そして」と置き換えられる。後者は「累加」や「並列」の意味を表す故、「それに加えて」や「それに」などと置き換えられるだろう。

実際的な用例を見ると、「それ+から」からなる複合語は、「継起」と「添加」(ひげ 1985、1989・浜田 1995)の意味を含んでいて、さらに下位分類ができ

る。

①ものを指し示す

(41) 『平家物語』を愛読して育った著者にとって、それから離れて書くというのはとても難しいところだが、いちど徹底的に突き放してみるならば、また違った見方も生まれるのではなからうか。(毎日新聞 2008/1/27 東京朝刊)

②場所を指し示す

(42) 入間川までは電車も相当混む、今は花時だから、それから先きが存外長いと思った、川越駅で下車して見る、別に昔と比べて目醒ましい発展をしているとも思われない。(中里介山『武州喜多院』青空文庫)

③時間と出来事を表す

a. 時間がはっきりした過去の出来事を指す。

(43) アメリカは1954年3月に太平洋のビキニ環礁で水爆実験をやったから、先生は大きな衝撃を受けた。それからは毅然として核廃絶を訴え、核兵器は「必要悪」ではなく「絶対悪」との立場です。(毎日新聞 2008/1/23)
それ＝ [1954年3月] [その時] [その年] (時間) か [先生は大きな衝撃をうけたこと] (出来事) を指し示す。(主語位置)

(44) 小2で野球を始めた。3人兄弟の真ん中で、負けん気が強い。高2の春、腰椎(ようつい)分離症で2カ月練習できず、家族に弱音を吐いたこともあった。そのけがを乗り越え、秋から活躍。今春は全国制覇を成し遂げた。しかし、それからが大変だった。(毎日新聞 2008/1/28)

それ＝ [今春] [その時] (時間) か [全国制覇を成し遂げたこと] (出来事) を指し示す (主語位置)

b. ある出来事・事件のあと

(45) 「まず彼を見つけることが大変でした。でも本当に大変だったのはそれからでした」。(毎日新聞 2008/1/25)

それ＝ [彼が見つかったこと] を指し示す (述語位置)

④先行文脈全体で言及されたことを基準とする。(指示詞と接続詞の接点)

(46) 彼は丁寧にネットをうまく利用した方がよいとか、話に乗ってくれましたが、私にそちら方面の知識が乏しくて具体的に話が進むということはありませんでした。それから会うこともなく時がたち、今回の逮捕劇となりました。(毎日新聞 2007/1/27)

⑤主体の継起的動作を表す (指示詞との接点)

(47) 冬、その大根がたくさんとれると、おばあちゃんは、小さく切ってそれから干して、切り干し大根にします。(毎日新聞 2008/2/6)

(48) 「ただいま」と家に帰ってきた。手には、かばんとスーパー袋、スーパ

一袋の中身はゴミである。帰ってきた私は、かばんをおいてスーパー袋ごとゴミ箱に入れる。それから手を洗ってひと休み。(毎日新聞 2008/1/23)

⑥主体の状態の変化

ひげ (1985) の指摘している主に人の身の上や経歴を語る場合、その人の過去の職業や社会的な状態を指し出す二つの文が、「それから」で結び付けられる出来事や時間などの解釈もできる

(49) 高校出て 19 歳で船場の帽子屋に奉公した。休みは月 1 回、日曜の半日だけという境遇に耐えかね、寮を逃げ出して新世界の酒屋に勤めていた兄夫婦の元に転がり込んだ。

それから梅田地下街の立ち飲みで 8 年、「丁稚 (でっち) ですわ」。(毎日新聞 2008/1/27)

(50) 両親の日本での仕事が忙しかったため、私は四歳半まで母国である中国に残り、母方の祖父と祖母に育てられた。でもそれから私は祖父母のもとを離れ、日本の両親とともに暮らし始めた。(毎日新聞 2008/1/22)

⑦時間的前後関係 (手順、順序): 「まず～次、それから～」

(51) まず自分に「こうしよう」という考えがあって、それから人の意見を聞く。そして自分の中で消化してから演じるよう心がけています。(毎日新聞 2008/1/31)

(52) まずは自分に素直に向き合おうと思う。それから家族や友達とも素直に向き合いたい。(毎日新聞 2008/1/25)

⑧並列関係 (時間的前後関係を持たない使い方): 「A、B、a n d C。」

(53) ベットの魅力は「正義感にあふれ、友人や周囲の人々に献身的に尽くすところ。それから家族を愛しているところ」と語る。(毎日新聞 2008/2/7)

⑨累加・添加関係

継起的関係と関連する使い方である。しかし、後件は前件と同じ重要性を持たず、ただ付け足し的な存在と言える。いわゆる主従関係である。

(54) 幼稚園児のころから、第二次大戦物の戦争映画におぼれる「軍事オタ」でした。それが中学時代から、三島由紀夫などを通して興味が兵器から思想や観念に転じた。それから、怪獣映画が大好きでした。(毎日新聞 2008/1/31)

①～③は具体的な先行詞や指示対象がある故、指示詞として見られることが多いだろう。文脈によって潜在的に「これ」「あれ」に置き換えられる。④は先行全体を指している故、「指示機能」と「接続機能」の中間的例と考えられる。

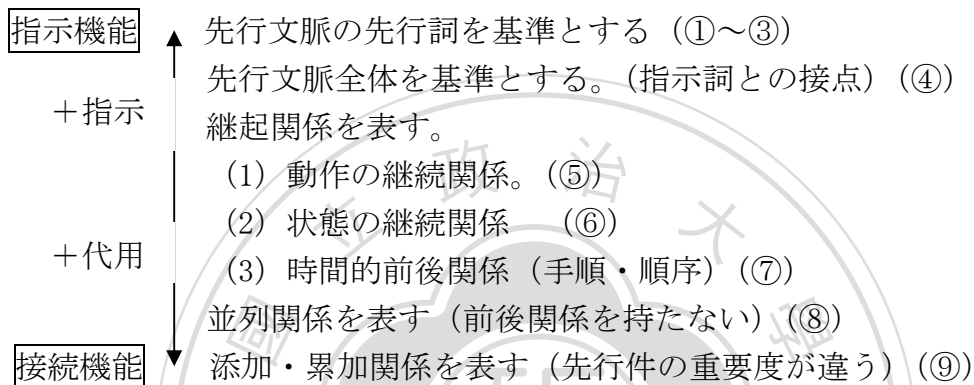
⑤～⑨の場合は「コ系語」と「ア系語」に見られない接続機能を果たしている接続詞と言えよう。時間の前後順序からの派生でありながら、話し手が話す時点を基準点とする「これ」と、指示時間を過去時点に限定する「あれ」と違

って、「それ」は漠然と先行文脈で言及された出来事を指し示す。いわば、先行文脈を基準点とする。そのため、過去の出来事だけではなく未来への予想にもなり得る。

(55) 今、夏に1本、自分の脚本で撮る予定でいます。それから、人の脚本でも撮れる監督になりたいと思います。(毎日新聞 2008/1/21)

上の例にも現れているように「それから」は指示詞から接続詞まで連続性を持っていると考えられる。つまり、以下(56)のように「指示→代用→継起関係→並列関係→添加関係」という順でメタファーしていると言えよう。

(56) 「それから」の連続性



4.3.4 「これから・それから・あれから」の意味拡張

時間を表す「これから」(今後)、「あれから」(過去のある時点や出来事の後から発話時に至るまで)と違って、「それから」は、先行文脈の先行詞を指す指示機能以外に、前後文脈が時間的前後関係、継起、累加、並列などの関係で繋がることを表す機能を持っている。その違いは、指示機能を持つコソアの抽象化過程によるのである。

(57) 指示詞としての抽象化 (もの→空間→時間・出来事)

コ系語の時間的な拡張は「現在」「今」

ソ系語の時間的な拡張は「非現在・非過去」

ア系語の時間的な拡張は「過去」

先行文脈で言及される場所、時間や出来事などの先行詞は、とくに「現在」や「過去」でマークされていない場合、「コ」と「ア」は使いにくくなるのではないか。

逆に言う「これから」「あれから」が使われる場合、話し手の現在の立場を基準としなければならない故、文と文の接続機能に派生できないのである。つまり、直示的時間に縛り付けられている故、抽象化が進まないのである。

しかし、「それ」の場合、こういった時間的な制約を持たず、主に先行文脈の先行詞に依存している故、「モノ」→「場所」→「時間」→「出来事」という抽象化過程が進み、最終的に先行文脈全体を指すことができる。さらに先行

詞を指示する機能が希薄化し、「それから」は文と文の照応関係から、文と文の接続機能に変わって、文法的機能を担うようになる。

先行詞より後の時間的前後関係から、前後文脈の継起的関係へ変化し、徐々に時間的な前後関係もなくなり、前後文脈は並列的關係も表すことができるようになる。「これから・それから・あれから」の意味拡張は表4にまとめられる。

表4:「これから・それから・あれから」の意味拡張

	基本義	意味拡張	
	文脈指示 (先行詞を指す)	時間副詞	接続助詞
	モノ→場所→時間/こと	→時間	→継起的関係
これから	○ (コノ + NP)	○今後	×
それから	○ (ソノ + NP)	○その後	○ (継起、追加、並列)
あれから	○ (アノ + NP)	×	×

全体的に指示詞と先行詞の照応機能(指示・代用)が文法化されて、先行文脈と後続文脈の接続機能に変化していると考えられる。

ソ系語は接続詞へ拡張することができるが、「それ」の接続詞への文法化はソ系語すべてが同じというわけではない。たとえば、「それから」は接続詞として認められるが、類似した時間の限界をあらわす「それまで」は副詞の機能にとどまり、接続詞への拡張意味を持たない。

4.4 指示詞から接続詞への意味拡張—文法化と意味の希薄化—

日野(2001:63)は「意味の希薄化」を意味変化の手段の一つとして取り上げており、「この過程において、語彙項目は語彙的ではない機能を持つようになり、最後に機能だけを持つようになる」と定義している。語彙項目の意味の喪失は特徴的である。そして意味の希薄化の種類として以下の二つを挙げている。

(58) ①指示的→文法的

②指示的→文法的・表現的⁸

接続詞の機能を考えると、接続詞が「指示機能」以外の「接続機能」を持つようになり、最終的に指示機能をなくすというプロセスは、まさに意味が希薄化していると言えよう。しかし、語彙項目の意味が喪失するとは言え、「それが」「それを」「それも」などテキスト的意味の付与があり、完全にものを指す機能(指示機能)が喪失していないものもある。意味の希薄化はまだ途中の段

⁸ 日野(2001)で定義する「文法的」とは「文法に関係のある」を意味し、「表現的」は「話し手を取り巻く環境に対する話し手の態度やスタンス」を意味する(日野2001:65を参照)。

階であるのだろう⁹。

指示機能から接続機能への拡張ということから、文法化による意味の意味拡張も解釈できる。文法範疇の変化が現れる点で、文法化は意味の希薄化と非常に類似していると言えよう。舩山・深田(2003)は文法化の過程について、文法範疇だけではなく、音形や意味の変化も含まれると考えている。

(59) ①形態素のタイプが変化する。

②音形的に短縮される。

③意味的にはもとの意味の漂白化が見られる。

そして、その三つの中で、一番最初に起こるのは、意味の変化であるとしている。その意味の変化も、元の意味・機能から急に新しい文法的意味・機能が成立するのではなく、元の意味機能から段々希薄化するにつれて、新しい意味・機能が成立するという連続性を持っている。

Hopper and Traugott(1993)は文法化を「より自立した状態からより拘束した状態への連続体」として定義し、(60)のようなモデルを提示している。

「A」は文法化前の段階を指し、「B」は文法化後の段階である。そして、「A」は「AB」という中間的な段階を経ずに「B」にはならない。

(60) コソアを含む接続詞の文法化過程¹⁰

A	→	A + B	→	B
指示詞		指示機能 + 接続機能		接続詞
[機能的変化]				
指示	→	(指示機能 + 接続機能)		= 指示的接続詞
代用	→	(代用機能 + 接続機能)	→ 接続機能	= 代用的接続詞
[形態的变化]				
それ (指示詞)	→	(それ + 助詞・接続助詞)	→	「それ + X」
その		(その + 名詞)		「その + X」
そう		(そう + 動詞)		「そう + X」

(61) ソを含む接続詞の文法化過程

それ → それ + から → それから (それから、それに、それなのに)
その → その + うえ → その上 (そのくせ)
そう → そう + して → そうして (こうして)

文法化には、語彙的要素から文法的要素へと至る途中に、いくつかの段階が

⁹ 筆者は指示詞を含む接続詞とは指示詞から完全に意味希薄化してはじめて接続詞と呼ばれると考える。事実、「それが」「それを」「それも」などのような「指示的接続詞」が普通、接続詞として登録されていないことが、その証左である。

¹⁰ Hopper and Traugott(1993)とTraugott(1989)では、「A>AB>B」という「>」の記号を使っているが、本稿では記号を統一するために「→」に置き換えることにする。

「それ＋X」という複合形式について、具体的な指示対象を持つものは指示詞で、そうでないものは接続詞であると見なされている。「それ」が「そのNP」に置き換えられるものは指示詞である。

②疑問詞で質問できるか。

①と関連して、先行文脈で具体的な対象を指示できれば、もちろん、疑問詞で問うことも無理ではない。

[接続詞の観点]

③ほかの接続詞と置き換えられるか。

④直接文脈展開の機能を持つか。接続詞によって後の文が推測できるか。

文と文の接続関係を表す接続詞を用いることによって、前後文脈の関係が明らかになり、聞き手（読み手）にとって、後続する文を予測することができる。できる場合は、話し手（書き手）が聞き手（読み手）に心の準備を与える「前置き」とも考えられる。また、話し手が相手に発話を続けるように促す用法でもある。浜田（1995 a）は次の例を「継続要求」、つまり、話し手の発話意図を表す機能として見ている。

(63) 良雄：「何処にいたのって、いったら」

耕一：「うん」

良雄：「ビジネスホテルとかねって」

耕一：「それから？」（浜田 1995 a）

しかし、実際の用例から見ると、接続詞は指示詞と区別しにくい中間的なものも少なくない。また、先行文脈を見ないと、指示詞か接続詞か分からないことも注意しなければならない。

庵は「指示的接続詞」と「代用的接続詞」とを区別している。前者の場合は「指示機能」と「接続機能」を共に具えている故、指示機能と隣接し、「非典型的接続詞」と呼ばれている。

指示詞と接続詞は、現場の「指示機能」が先行文脈の「照応機能」を介して、文脈間の「接続機能」と連続している。具体的に、「指示→代用→接続」のルートで拡張していくと言える。これは、表3（再掲）のまとめの通りである。

表3：「指示機能・照応機能・接続機能」の連続性

指示機能	→	照応機能（指示・代用）	→	接続機能
指示詞		「指示的」		接続詞
それ		それが、それを		代用的接続詞
				それに、それで
「それ」＋「X」は先行文脈の先行詞を指している。「そのNP＋X」と置き換えられる。		「それ」は「もの」から「時間・出来事」へ抽象化している。		「それ＋X」が全体的に文と文の接続機能を担う。「それ」は先行する文脈を代用する。

4.5.2 意味拡張における「これから・それから・あれから」の違い

意味拡張の観点から見れば、「これから」の場合は指示詞の「これ」と格助詞「から」と合わせて「時間副詞」へ意味拡張していると見られる。

「あれから」の「あれ」は「過去の時間」や「出来事」を指し示す故、必ず先行文脈に表れる先行詞と話し手の記憶を参照しなければならない。それ故、「あれ」は「文脈指示」や「観念指示」の使い方に止まる。

「それから」は「あれから」と同じく、先行文脈の先行詞を指示することができるが、「過去」に限定されない。話し手の話す時点にも限定されない故（非過去・非現在）、先行詞より後の時間的前後関係から、前後文脈の継起的関係へ変化し、徐々に時間的な前後関係もなくなり、前後文脈は並列的關係も表すことができるのである。

(64) 「これから」：時間副詞へ拡張する。

「それから」：接続詞へ拡張する。

「あれから」：指示詞のままである。

4.5.3 指示機能から接続機能へ

指示詞を含む接続詞は指示詞から拡張されたものと考えられる。「それ＋X」という接続詞の意味拡張は、指示詞から文法化したものであると言えよう。

その文法化過程として、(60) で示したモデルを再掲する。

(60) (再掲) 指示詞を含む接続詞の文法化過程

A	→	A+B	→	B
指示詞		指示機能+接続機能		接続詞

ABが共存する段階では、指示詞の機能はまだ残されていると考えられる。典型的接続詞（代用的接続詞）も非典型的接続詞（指示的接続詞）も、ともにこの段階を経るが、最終的に指示機能が消え、接続機能だけ残るのは典型的接続詞（代用的接続詞）だけである。接続詞（B）の段階に至って、文脈の「接続機能」というテキスト的機能を表すと同時に、話し手の発話態度を表す「文脈展開機能」も帯びるようになることも考えられる。